

- *イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」(ヨハネ8:12) 先の7章で、仮庵の祭の際、シロアムの池から水を汲んできて神殿の祭壇に注がれるという儀式があった。そのような背景で主イエスは「だれでも渴いているならわたしのもとに来て飲みなさい。」と言われた。この8章では光が焦点になっている。イエスが話しておられる所は「女性の庭」と言われるところで、異邦人は入ることができなかったが、イスラエル人は女性も入ることができる場所であった。その四隅に大きな燭台があり、灯をつけると神殿全体のみならず、町まで照らし出されたという。出エジプトの時、昼は雲の柱、夜は火の柱が民を先導して進むことができた恵みを覚えるものとしてこの燭台の灯はあったのだと思われる。そのような場所で、主イエスは「わたしは世の光です」と言われたのである。
- *「わたしは～です。」とイエスが神であることを自ら比喩的に断言される言い方がヨハネの福音書に七回出て来る。先には「私は、いのちのパンです。」があった。ヨハネはイエスのことを「すべての人を照らすまことの光」(ヨハネ1:9)と紹介している。それは消えることのない根源の光である。その光は私たちの内面の暗闇、すなわち罪を照らし出して私たちを悔い改めさせる。また、私たちの足元を照らし出して私たちの行く道を明らかにする。私たちは闇の中にいたくないし、闇の中を手探りで恐る恐る歩きたくない。明るく照らされた道を、胸を張って歩きたいと思う。
- *神殿の庭でイエスの話を聞いていた人の中にパリサイ人がいた。彼らは「わたしは世の光です」と言われたイエスのことばは真実ではない、うそだ、自分で自分のことを言っているだけなので信用できないと言う。しかし、イエスは、わたしはあなたがたと違って、自分で証言することながら、すなわちわたしが話すことはみな真実で正しい。それは「わたしがどこからきて、どこへ行くのを知っているからです。」と答えられた。イエスは天の父の所から来られて十字架にかかり、死んでよみがえって、また父のところへ帰られるのである。「わたしが自分の証言であり、また私を遣わした父が、私について証しされます。」(8:18) ユダヤの律法では、法廷で二人以上の証言が必要であったが、イエスは、わたし自身とわたしの父が立派な証言者であることを主張されたのである。パリサイ人たちは、イエスを理解することができなかったので、残念ながら、まことの光をいただくことはできなかった。私たちはどうであろうか。
- イエス・キリストを信じて従えばいのちの光を持ち続けることができるのだ。光の中を歩みたい。